思い出また明日☆

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思い出また明日☆

【Ｎコード】
Ｎ６４４９Ｚ

【作者名】
落ちぶれた天使

【あらすじ】
コナンと組織の最終決戦！？
なのだ・・・

キーボード

解毒剤も組織へもおとさたないまま半年がたった。
もうすぐ2年生になってしまう。
コナンは窓の外をみながらボーっとしていた。
それを蘭が悲しそうな顔でみつめる。
小五郎はこのなんだかやな空気にゴクリとつばをのみこんだ。
ふと事務所の下をていたんの制服をきた生徒が歩いていた。
コナンはかなり悲しげな、懐かしそうな顔をして、携帯を窓のそとに顔を出しながら新一用の携帯をいじっていた。
なぜかあまりに考え込みすぎて小五郎や
蘭がすぐうしろにいることにもきずいていない。
しばらく携帯をいじっているとコナン用の携帯がなりだす。
コナンは新一ようの携帯をもったまま、コナン用で電話にこたえた。
コナン「もしもし？」
平次『あ～俺や俺。いまから東京駅きてくれへんか？』
コナン「・・・は？・・・」
平次『せやから東京駅に和はときてるんやって。はよーしてくれや。』
コナン「・・・きるぞ・・・」
平次『っちょうまちィ！？！？！？』
コナン「っうっせぇなぁ。たく、なんでいちいちコナン用にかけるんだよ。新一用にかけろっての。てかさ、携帯の地図でこいよ。ここ5丁目だ。」
平次『なんやつめたいのぉ。近いやんけ。いつか運動不足になんで工藤。』
コナン「うるさい。わぁったよ。いまいくからまってろ・・・じゃぁな。」
コナンは一方的に電話をきって事務所をとぼとぼでていった。

コナンは正直いま平次に会いたくなかった。
現役の高校生で、しかも同じ探偵となると自然とむなしくなってくる。
コナンははあっとおおきくため息をつくとゆっくりあるいていった。
コナンからはどす黒いオーラがはなたれ、通行人の目をうばっていたことは言うまでもない。
駅につくと遅いぞといわんばかりの平次と和葉がいた。
だが二人ともコナンをみると冷や汗をたらした。
コナン「・・・いこっか・・・」
コナンはそれだけいうと歩いていく。
平次もかずはも一切しゃべらずただコナンについていった。
家につくとでむかえた小五郎と蘭がさっきにましてどす黒いオーラをはなったコナンをみて口をむすんだがコナンは考え事をしているため一切きずかず、台所にむかって熱いブラックコーヒーをいれてパソコンにむかっていきただ1人でキーボードをならしながらコーヒーを飲んでいた。コナンの態度が尋常でないと考えた小五郎たちは探偵事務所におりていった。
蘭「どうしたんだろうコナン君・・・」
かずは「あれは尋常やあらへんよな・・・あ、蘭ちゃんあめちゃんたべる？」
蘭「ありがとう。」
小五郎「とりあえず一回話しかけてみるか・・・」
小五郎たちはまたコナンのもとへもどっていった。
コナンはあいかわらずキーボードをたたいている。
小五郎が試しにはなしかけてみた。
小五郎「な、なぁコナン。」
コナンはゆっくりふりかえるとさっきの倍にましたどす黒いオーラをだしたままふりむいて小五郎を鋭くにらんだ。
コナン自身はにらんでいる感覚はまったくない。
コナン「・・・なぁに？おじ、さん・・・？」

全員このにらみにはおびえた。
小五郎「い、いいいやなんでもない！！俺や蘭たちはマージャンいってくっからな！ラーメンつくってたべろ！！」
小五郎はそういうとそそくさといえをでていった。
それにつづき他のめんばーも家を出て行く。
コナンはまたキーボードをならしだした。

荷造り

家に小五郎たちがかえってくるとコナンはまだパソコンをやっていた。
あのどす黒いオーラは少しだけよくなり、小五郎たちはほっと胸をなでおろした。
コナンは帰ってきたことにきずかないほど集中してキーボードをうっていた。
コナンは探偵団にたのまれた、いろいろな薬品について説明してほしいとのことを全部フロッピーにうちこんでいた。
中には子供、いや大人でも分からないほどの数式や言葉、現象や薬品名などがかいてある。
そのときコナンの携帯がなった。
コナンはディスプレイに灰原とかかれているのを確認すると電話にでた。
コナン「もしもし」
哀『子供達に頼まれてたの終わったの？こっちは一応実験の準備はおわったけど。』
コナン「あと少し。あいかわらずガキのなかでお勉強会とは。しかも2回目の小学校だぜ？きずかれするぉ・・・」
哀『たしかにね。』
コナン「大体5＋5は？わかんなーい、とかやってるやつらとお勉強たぁ・・・悔しい限りだぜ・・・組織の情報もぜんぜんはいってこねぇし。ＦＢＩのほうもほとんどつかめてねぇみていだしよ。」
哀『同感ね。組織のことで新しい情報がはいったわ。』
コナン「なに！？」
哀『私たちのこと、ばれてきたみたい・・・たまたまとおりかかった構成員に私たちの顔をみられ、それで宮野志保そっくりの私と工藤新一そっくりの貴方が存在することがわかったてところだと思う

わ。貴方もしってるとおもうけどここ1週間だれかから視線をかんじたり、学校にいるとき、誰かに私や貴方、とおくからとられてるみたいだし・・・』
コナン「え、最近考え事してたからきずかなかったぜ・・・」
哀『さっき私がお風呂はいってて博士がコンビにいってたとき、組織が私の指紋をとりにきたのよ・・・だからあなたも、すぐそこからでて、ホテルでもどこでもいいから避難するのね・・・いま私も博士もホテルだから。』
コナン「いまうちに服部たちがきてるんだよ・・・早く非難しねえとあいつらも巻き添えにってえ!?」
コナンはやっとうしろに小五郎たちがいるのにきがついた。
あわてている平次いがいはみんなふしぎそうにコナンをみている。
コナン「やべ、電話の内容おっちゃんたちにきかれた・・・」
哀『はぁ!?とりあえず蘭さんのお父さんにかわって。』
コナン「ん?お、おう・・・。おじさん、灰原がおじさんに。」
コナンはそういうと小五郎に携帯をわたした。
小五郎「もしもし。」
哀「いまから米かホテルにきなさい。そこでしばらく寝泊りしなさい。」
小五郎「はあ!?」
哀「いいからしにたくなければとまりなさい、っていってるのよ!!!!!!!!」
小五郎「は、はい!!!」
哀はそうすると電話をきった。
小五郎は仕方なく荷物をまとめはじめた。
出費のことをかんがえているらしい。
するとコナンは財布から父親のカードをだして小五郎にわたした。
コナン「こ、これつかって!!!それとはやくして!!」
小五郎「お。おいなんでこんなカードおめぇもってんだ!?」
コナン「親父のだよ!!とにかくはやく!!」

コナンも平次もかなりあせってみんなにづくりさせる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6449z/

思い出また明日☆

2011年12月21日20時50分発行